

MBS 『労組と弾圧』に反響

9/8 TBS(首都圏)放映で

●町山広美さん(放送作家)が信毎にコラム

MBS制作の「労組と弾圧」が9月8日深夜にTBS(首都圏)の「ドキュメンタリー・解放区」で放映されるとお知らせしたところ、多くの方々から視聴したとのご連絡をいただいた。

町山広美さん(放送作家)は信濃毎日新聞のコラム「怪しいTV欄」で、「労働運動と権力の弾圧に遅まきながら光」と題して次のように書いている。

「関西生コン。その名をネットなどで見かけてはいても、何が起きているか知ろうとしなかったことを恥ずかしく思います。」(2ページに掲載)

町山広美さんは「有吉ゼミ」「マツコの知らない世界」などを担当する放送作家。「タモリ倶楽部」では人気の空耳アワーコーナーを担当した。信毎ではコラムニストとして「BC級戦犯裁判」「南西諸島への自衛隊配備」など硬派なテーマを隔週で取り上げている。

●番組制作ディレクターを招いて

「月刊大阪弁護士会」9月号は、「司法改革大阪各界懇談会」が6月18日にMBSの担当のプロデューサーとディレクターを招いて聞いた番組制作の経緯と苦労話をまとめて掲載している。

(3ページに)

京都事件シンポジウム

労働組合活動を犯罪扱いさせてはなりません

11/12 (火) 18:30 ~ 20:30 (受付開始 17:30)

会場 キャンパスプラザ京都 第1講義室 (300人)

JR 京都駅から徒歩5分

内容 報告1 片田真志弁護士(関西生コン弁護団)

「京都事件とはなにか」

報告2 中谷雄二弁護士(大垣警察市民監視違憲訴訟弁護団)

「画期的な名古屋高裁判決の意義」

パネルディスカッション

金平茂紀(ジャーナリスト)

山田省三(中央大学名誉教授)

海渡雄一(弁護士、関西生コン事件国賠訴訟弁護団)

コーディネーター・竹信三恵子(ジャーナリスト)

資料代 500円

主催 関西生コンを支援する会



関西生コン。その名をネットなどで見かけてはいても、何が起きているか知ろうとしなかったことを恥ずかしく思います。

TBS系の「解放区」枠で放送された「労組と弾圧～関西生コン事件を考える～」を見ました。番組サイトには「遅ればせながら光を当てる」とあります。番組はMBS毎日放送（大阪市）が制作したドキュメントです。関西圏では3月に「映像24」枠で放送済みですが、こちらの番組サイトにも「遅まきながら考え直す」とあります。

連帯ユニオン関西地区生コン支部は、ミキサー車運転手が個人で加盟できる産業別労働組合です。団体交渉で勝ち取った労働条件が、企業を横断して業界全体に適用される。一斉ストも実現してきた「経営側にとって」手ごわい存在です。

ミキサーに積み込まれる生コンクリートは、固まる前に90分で運ぶ必要があるため、在庫の調整ができず、大きな生産拠点も設けられない。ゆえに小規模の会社が多い一方、原料になるセメントの仕入れ先も納入先のゼネコンも大企業がほとんどで、相手に合わせることを強いられる立場。不均衡は現場にのしかかり、建設業界が潤ったはずの高度成長期でも運転手の待遇や労働環境は劣悪でした。

改善を期して、関西生コンが立ち上げられたのは1965（昭和40）年。あるシングルマザーの運転手は、セクハラの被害を相談したことから、この労組に加入したと話します。

労働者の権利を守る運動。多少の迷惑を被ってもその正当な権利の主張を容認する構えが日本の社会にあったことを、私も確かに記憶しています。

けれどもある時から変わってしまった。働く側より「経営側にとって」の不満に社会が肩入れするようになったと感じます。本欄で書いてきましたが、労働より消費に価値を置くような「消費者」という自己認識が広く共有されたことが分岐点でした。さらに、労働者でも経営者でもない立場で大金を手にしたことを誇る人が増えると、ますます「労働者」という自己認識は遠のきました。生活の手段として人生の時間を切り売りしていることに、多くの人は変わりないのに。

2018年、関西生コンに強制捜査が入ります。そして次々と、組合員を威力業務妨害や恐喝未遂の容疑で逮捕。のべ81人に及びます。異例の長期勾留、警察や検察の取り調べでは保釈と引き換えに組合脱退を迫られ、罪を認め脱退に応じる人も続出。これは明らかに、国家権力による労働運動への介入だったと番組も指摘します。

こうした状況が報じられない一方で、「関西生コンは反社会的組織」との噂がネットなどで広められていきました。私も目にしてしまっていたように。

自分には労働運動の範囲を大きく逸脱した行為はない。その確信を持って否認、黙秘を守った組合員には裁判で無罪判決を得る人も次第に増えてきましたが、これらもまたあまり報道されていないと番組は自戒します。

現在の社会には、労働者の権利を主張することを人ごとと遠ざけ、むしろ経営者側や権力側に寄り添うのを好む傾向があると思います。それが力を持つ側に、まんまと利用されている。

裁判は続いています。そして番組は、MBSの配信サイトで視聴することができます。（放送作家）

〈第1、3金曜日に掲載します〉

労働運動と権力の弾圧に遅まきながら光

司法改革大阪各界懇談会レポート

第288回 (2024年6月18日)

「映像24 労組と弾圧～関西生コン事件を考える～」 番組制作者をお迎えして

お話：橋本佐与子（MBSプロデューサー）

伊佐治 整（MBSディレクター）

司法改革大阪各界懇談会 永井美由紀

6月18日の各界懇では、MBSのドキュメンタリー番組「映像24」の「労組と弾圧～関西生コン事件を考える～」(今年3月31日放映)を制作されたプロデューサーとディレクターをお招きして、映像を上映後、お話しいただきました。この番組は2023年度のギャラクシー賞(テレビ部門選奨)を受賞されています。

関西生コンの逮捕者が続き始めた頃、「こんなひどいことが起きている」と言っても、「あそこでしょ」「やり過ぎたんじゃないの」と関心を向けてもらえませんでした。伊佐治ディレクターもそうした一人だったそうです。

以下は概要です。1時間半にわたる話は、ときおり笑いも起こる興味深いお話でした。

関西生コンの逮捕のことは聞いていたと思うけれど、関心はなかった。どこかで、「関西生コンはハンシャでしょ」という刷り込みをされていたようだ。会社も、他社に抜かれても反応がなく、関西生コンの事件は報道すべき事件とみなされていない状態だった。それが変わったのは竹信三恵子先生の「デモクラシータイムス」だった。視聴して衝撃を受け、すぐに関西生コン支部に連絡を取った。

関西生コン労組(以下「関生」)への弾圧を題材にして映像をとりたく先輩ディレクターに相談をしたら、「自分も番組を作ろうとしたが、踏み切れなかった。今なら無罪判決も出ているから、つくれるんじゃないか」とアドバイスされた。ただ実際に取材を始めたのは、加茂生コン事件の最高裁「破棄差戻し」から。高裁で無罪になる可能性はあるのかと不安に駆ら

れ、著名な労働事件弁護士に尋ねたら「無罪をとれるんじゃないの」と言われて、取材を継続していった。

関生が作った『ここから』は、いい映画で、この映画の存在は重圧ではあった。しかし、なにしろ過去に取材をしていないので素材がない。『ここから』や関生が記録として撮影してきた映像を提供してもらって、作り上げることができた。『ここから』と同じようなもん作られても困るんですけど』って言われて、無茶苦茶プレッシャーを感じたけれど、「こっちは作り手ですからそんなことしませんよ」と返答して、『ここから』とは違うものは何かと考えたときに、自分はメディアなので相手方の取材をしなくてはいけないと思うようになった。警察官僚OBの池田克彦氏に取材して警察幹部の見方を聞き出せたのは大きかった。右翼の瀬戸弘幸氏のところへもすぐ行った。何よりも無理だろうと思っていた大阪広域協への取材ができたことは大きかった。大阪広域協への取材は入念な準備をし、ほんとうは「なぜ関生と袂を分かつことにしたのか」を聞き出したかったが、そこまではできなかった。

取材していて、こういう「告発モノ」のドキュメンタリーといえども、出てくる人の人間性が大きいなと感じた。加茂生コン事件の当該の吉田さん、『ここから』の松尾さん、久堀弁護士など登場人物に恵まれた。

裁判は「裁判官」にかかっているなど思った。とはいえ、メディアの偏見、知識のなさ、司法の絶対視も問題で、私自身も今回そのことを認識した。

先輩たちの背中を見て、またそんな先輩たちの姿に背中を押されて、ドキュメンタリーの制作に携わってきた。今後も付度なくドキュメンタリーをつくっていきたい。